



当然変わるのですけれども。お茶の水の時代にやっ

ていたことは、今はとてもやれませんが。今の子どもはほんとうに違うのです。三年前とも去年とも違う。ひとつはことが達人になっています。それから、からだが大きくなっています。それでいて、人間として考えた時に、生活の面での行動が「原始的」になっています。これが極端に出ていて、からだ・ことばとたいへんアンバランスに育っているという感じを受けています。ですから、これだけ実践者として年月を経たのに、いまだに新しい人たちを受けると、どんな子なんだろう、どういう中味の子なのだろうと、新卒のように心配です。自分から「何かをする」とは毛頭考えられない子どもたちなんです。子どもが持って生まれた能力、人間としての力の上に、まわりから別のものが乗せられてしまったものですから、子どもは押しつぶされて、持って生まれた能力は下積になり、本来の力を出す

ことができないでいます。

### 幼児が自分自身になって遊ぶ姿

津守 ずっと昔、私がまだ大学生だったころ、はじめてお茶の水の幼稚園に行きました。三歳児が砂場の中で、ほとんど午前中いっぱい没頭して遊んでいる姿が心に残りました。その幼児の姿は、勉強があまりなくなつた大学生が、勉強に吸い込まれるのと同じだと思いました。幼稚園は子どもが真剣に人間になっていく場所であること、幼児が自分自身になって遊ぶ遊びがどんなに大切かをこの時考えさせられました。

またこの頃、私は自分の正義感から三歳児の肩をつかまえて怒ったことがあります。その時、堀合先生に「あなたのはしたことは、三歳の子どもにすることではありませんでしたね」といわれました。それ

が今でも胸に残っています。どんなに正義感があっても「三歳の子ども」。その時これが抜けていたんです。いまだに、ここで学んだことの連続です。

その当時、砂場での姿に魅せられながら、一方で、それだけで幼稚園教育はいいのだろうかという疑問も持っていました。そのことについて、アメリカでも同様の経験をし、その経緯を知りたくて、幼稚園の歴史を研究しました。

アメリカでは新教育・進歩主義教育が一九〇〇年から三〇年代にかけて盛んになり、それが幼稚園運動として展開されました。倉橋惣三先生はこれを日本に入れようとされ、しかも、彼はそれを日本的性格を持ってされました。それは子どもと大人との間の、ある種の優しさとする種の厳しさを持った人間関係を大事にするものであったと思います。例えば、あの有名な『育ての心』の中の「飛びついてきた子ども」にもそれがよくあらわれています。

新教育運動の特徴として「誘導」があります。これは倉橋のことほでもありますが、単元保育ということですが。昭和三十年代ですが、堀合先生がそれを実際におやりになったんです。動物園とかおもちゃやさんとか、この先生がやるとひとつのテーマが一学期とか少なくとも二か月は続くんです。おもちゃやさんの実践だと、子どもや先生が作ったおもちゃがそれらしく飾ってあるところから始まって、ちやうちん、乳母車、カメラ、ぶらんこ、洋服だんす、大小の本など、子どもたちが次々に作り出していきます。毎日毎日変わって行って、ほんとうに楽しい。小さい本など、家庭に帰って私を作ると、必ずといっていいくらい私の子どももそのあとを続けるんです。子どもたちに受けるんです。ちやうどこの頃、プログラム保育がはやってきて、知的教育も盛んになってきます。アメリカでも同じようなことが起きていたんですが。お茶の水の幼稚園も「遊んで

ばかりでいいんですか？」という質問を受けたりしていました。この誘導保育のよさをどうしたら明るみに出せるか、毎日克明な記録をとって、苦勞したけれど結局できなかったんです。そこで、堀合先生におたずねしたいことは、この時期のこの保育を、今どう考えておられるかということです。

「運動会って、なきゃいけないんでしょ  
うか？」

堀合 附属幼稚園の中に津守先生の研究室がありました。私は毎日保育をし、津守先生は観察にいらっしゃるといふ日々でした。運動会、私はずっとそういうものだと思ってきましたのですが、第二学期が始まると種目が決まります。その中で、「おゆうぎ」だけはある程度練習しないとできない。それで、十時ぐらいに音楽が流れて、子どもたちは園庭に集まっておいこが始まるのです。うちの場合

は、その時代ではゆるやかな方だったんですが、それでも時間を区切って順番に練習をしていました。ある日、津守先生が「先生、運動会ってなきゃいけないんでしょか？」、私は「ハッ？」、実はびっくりして、いうことばもなかったなと思います。子どもの記録の中に「あっ、また集まるのかー」などとブーブー言って、庭から上

がってくるというのがあるわけです。それに「このごろ、

子どもが夜中にとび起きるんです」「ぐずってしょうがありません」という声も父兄から聞いてはいたのですけれど。それじゃ、やっぱり集めるのは、子どもにとってたいへんなことだ、朝来てから一生懸命遊び始めて、それなの



にその生活がちょん切られるわけですからね。それから、考え方が変わりました。次の年から、何とかして集めないでやれないものか、もちろん運動会はするのですけれど。

津守 一緒に記録をとっていると、学生さんが教えてくれるわけです。「この子いつもと違う、変だ」など。で、材料を持っていくと、堀合先生はびくっとして、立ち止まって、考えて、やり方を変える、そういうことが何度かありました。その後、運動会がどうなったかと言いますと、堀合先生のクラスは、全然練習しない。でも本番には子どもたちがしっかりやってくれて、めでたしでした。でもよく考えると、やってくれなくても別にかまわない。堀合 先生はやらなくなっただいいんじゃないかとおっしゃっていたような。

津守 むしろ、本番が新鮮だから、すごい意気込みでやった（そうなんです）。

堀合 こういうふうに、津守先生には時々チクッと言っていただけで、私も考えて変化してきました。

津守 そこで、第三者の目というのが重要になります。実践者は「自分がこれだけやったら、子どもがこれだけのびた」、「自分が子どもものは一番よく知っている」という気持ちになりやすい落とし穴がある。それを外からパッと見せてくれるのが研究者。

堀合 今はたいへん申し訳ないけれど、お茶の水幼稚園のあの時やっていた保育は全く通用しません。四十年もごやっかになってこんなことを言うのは叱られそうですけれど。

あの頃（昭和三〇年代）は遊ぶことを、みんなそんなに大切にしていなかったように思います。どうしてみんな遊ぶことをしないんでしょう、何かをやらせることばかり考えてと、ぼやいていたのを覚えておられます。「遊びが大切だ、遊びの中で指導す

るんだ」こういうことを全国に広めてくださったのは、津守先生だと思えます。

津守 それはどうでもいいことで。そのうちに、研究者として観察しているだけじゃどうしても限界があつて、もつと子どもとかかわることで子どもを理解するという方向に変化していきました。

ある日私は砂場について、子どもたちがちょうを追いかけるのを見て、それをさりげなく逃がしてやりました。子どもたちは怒って私に砂をかけて来ます。それに應對するのに私は他人の目を気にして、砂を投げ返すことはしませんでした。これは堀合先生のクラスでのことで、さっきのあのことを思い出したんです。そこで、こんなことをすると、先生に叱られるんじゃないかと思つたんです。気まずいままに終わってしまった、その後私は、ほかの何をさしおいても、その子たちとの関係は回復したいと考へました。これがその時「保育の場で私が最も大切

にしたいこと」でした。

次の機会に、あの子どもたちが、砂場で水遊びをしていて、「おじちゃんの足もうずめよう、靴ぬいで」と言い、「よし、ぬいでいくぞ」といって靴を脱こうとすると、「ほんとうにぬぐかな?」と射すように自分を見ているのがわかるんです。それで、私が砂場で靴を脱いで子どもたちと同じ地面に立つことができたんです。それがきっかけとなって子どもとの関係を回復できたんです。この頃から第三者として研究する立場から、子どもとやり合うことよって子どもを知るといふ立場に変化して来ました。

最後に「子どもの行動を表現として見る」ことに、昭和



四〇年代なかばに行き着きました。私は自分の子どもの絵を捨てないでとっておき、何度も何度も眺めていました。二歳、三歳、四歳の初めの頃のめっちゃめっちゃう絵、そう見える絵を描いた頃の子どもの内面は混乱していたり、自分でも訳がわからないでいたりしているのです。外側から見るとめっちゃくちゃだけど、大人に見えないだけで子どもはちゃんと自分の心をそこに表している。その時に、「行動を行動として見るのではなく、表現として見る」ようになりました。

この考えの基本を作ってくれたのが、ルードビッヒ・クラークスの書いた『リズムの本質』という小さな本です。これをその当時、堀合先生は読んでおられた。

堀合 運動会のことがあったから、結局「音楽リズム」の考え方を一八〇度変えたのです。それをしないと、また練習、練習になりますから。その時代に

変えました。その時に読んだ本が同じ二本だったのです。

保育のことは——「集める・集めない」「指導」

「教育」

秋山 今現場では、子どもが遊んでいる時に「集めることはよくない」というような、保育のかたちやことばに関する誤解が色々あるようです。先ほどの運動会でも「集めることで子どもの生活を切る」というお話がありました。これをどう考えたいのか、お二人にお聞きしたいのですが。

堀合 ことはと言いますと、その頃「お茶の水へ行くと、自由保育よ」とよく言われたものです。それに対してどなたかが「一斉保育」ということばをお作りになった。私がしていたのは、「まず遊ぶ。遊びを中心にして子どもを育てていく。子どもの生活を壊さないで保育者の方がかけていって保育して

いく」ということです。

毎日、まず遊ぶ。それは基本だけでも、その中で生活を崩さないで教育をしなければならぬ、これは頭にこびりついています。一人一人に対して、よく見てよく考えて、出ていかないと子どもは育たない。ことばでは言いにくいんですが、ある時は子どもがせっかく楽しく、あっちこっち走ったりしているのに、先生が「危ない」と先に言ってしまったら、ほんとうに危ないことをしそうなった時に声をかければいいのにタイミングがずれている。あるいは逆に先生が全く動かないで、指示するだけだったり。自由の形であっても一斉と同じことになってしまう。

私の若い頃の保育技術の勉強は、音楽リズム・製作・お話などが上手にできることでした。今は、もっと大事なところに技術があります。子どもをよくみて「もっと、手を貸してあげた方がいい」「も

うちよつとやらせた方がいい」「今、出ていった方がいい」などです。「何かをやらせる」というのは次のことです。これが今の保育技術で、保育者が自分の頭・からだ・心・神経を使ってすることです。この辺がたいへん難しく、ことばになると全然子どもとの状態とも違うし、こちらの出方も違ってくる。ことばにならないところを感じとって、それとうまくやっていくのがほんとうに重要だと思えます。

「指導」とうっかり言うと、誤解されますが、ほんとうは指導しなきゃいけないんです。今の時代、教育していく場面もあります。けれども、「教育」は「教えこむだけの教育」ではありません。こういうことは成人した時にあっては困るということでは教えてあげたいと思う。しかし、じゃあ、成人の姿から今を規定してやってあげてしまおう。これを整理して、はっきりよくなさる先生もおられます。でもそれをやると、子どもには気の毒で、子どもの自分か



ら育つ能力を引き出すのが保育者の務めでしょう。今の子どもは、外から与えられたものが自分のものようになって出ている子どもが多いような気がしています。ほんとうのその人のもっている能力を出すようにするには、まあ、はっきり言って遊ぶしかないんですね。遊ぶ生活をさせる、そうすると、知らないうちに自分の力を使えるようになる。ところが、そこで「遊べ、遊べ」とだけ言っていると、「放任」ということになるので、そこに教育というものが処々にあると思います。子どもを教えてあげるといっても、あれとこれと言えないのが、幼児と保育者の関係かなとも思いますが、「あつ、ここは乗っちゃいけないんだな」と、子どもが自分から気づくように日常生活の中で誘導する。外側から見えないところを育てていかないと、いけないと思います。

津守 実際の保育の場に出るようになって、一番思っているのは、「自分らしい保育をすることの大切さ」で

す。私には私の癖——考えの傾向——があるし、他の人にもあります。保育はみんな違っていい。かつては堀合先生の保育をモデルかと思っていたけれど、モデルはひとつではありません。それぞれが自分らしい保育をすることから自然にすてきな保育になっていくんじゃないでしょうか。「自分らしい」というのは、怒りたい時に怒るのではなく、それでは歯止めのない衝動的な言動に過ぎないので。保育というのは相手に即して、相手が何を欲しているかを敏感にキャッチして応答しなければなりません。つきつめて言えば、生きているのは子どもで、子どもは自分で考えて決める。それに対して、大人も自分の考えを述べる。子どもに即して、一生懸命何を願っているか、何を必要としているか、欲しているかを察して、その人なりにそれぞれのやり方があり、それが自分らしい保育になる。

「集める・集めない」についていうと、ことばは大

雑把過ぎて、「集めない」と言う。「集めるのはいけない」になったりする。その時々、子どもの必要と状況があり、保育する大人も自分の状況（社会・自分の背景など）を背負っているのです、その声も入れて。ただしその時に、保育者として一番大切にしていることは何かということをも自分として常にしっかりとさせていることが大事です。

子どもは、きょうの私の気持ちを持っていてしまう

堀合 今の子どもは、大人以上の鋭さを持っていて、保育室に入ったとたんふわっと私の心の中を持っていてしまうんです。何にも「おはよう」も言わないのに、きょうの私の気持ち、感情をみんな持っていつてくれる。それでいて、子どもがいろんなことを逆にわかってしまう。別に（保育室の）中に入ってくれなくてもいいのですけれど、その人に

対して、私の心をどういうふうに通かしていくのがいいのだろうか、それこそ、寝ながら考えたこともある。その人に対する私の心の持ち方、愛情の持ち方を、すばやくとって来て、何か言うをやめてくれたり、素直になったり、行動を変えたりして、それほど困らないことになっていくということ、

ずいぶん体験している。今の子どもに対しては、まず考えるのは大人の自分自身じゃないか、まず保育者が自分を生まれ変わるくらいに変えていかないと、今の子どもたちも変わって下さらないんだ。いくら一生懸命やっても、子どもに通じないんです。この「通じない」というところが、保育の実際の面で



今の大事な課題になっています。

津守 そのことですが、障害を持った子は特にそうです。保育者が言わず語らずのうちに「この子、歩かない、しゃべらない、どうしよう」と思っていたら、そこでパッと関係が切れてしまう。自分が子どもをどう思うかが出発点。自分はこの子と対等な人間だ、「この子、ことばが出ない、私だって出ない時がたくさんある。現に今がそうだ」と心から思っているかどうかで、そこから先が決まってしまう。

秋山 最後に、若い先生方にこれだけは伝えたいということ。

堀合 子どもはある程度の成長をしていて、感わされてしまうけれど、ほんとうによく見て、よく感じとって、子どものほんとうの内面的なものを育てることを第一に考えて、次に、そのためにも自分を変えていくことだと思う。今は知識や学問があり、大人の方も頭でっかちになっている。だけど子どもに

当たるとは、それは捨てる覚悟で無くなって子どもとともに生活する、保育者ということは捨てるわけにはいかないが。また、研究者の方は少し角度を変えて、研究のための研究でなく、すぐには言わなければ、現場に役立つ研究をしていただきたい。

津守 「自分は人間として今成長しつつあるか」これはすごくむずかしいので、自分が言うのは気がひけるけれど、この問いがないと、子どもがということにはなっていないと思います。

おわりに

対談を聞いてみると、お二人は立場は違うけれども、同じ保育の場を共有しながら、互いに共鳴しながら進んでこられたということがわかる。そしてお二人とも、それぞれの場で現在の子どもたちを見つめ、子どもたちと共にあるために、自分自身が変わることを第一にあげることによって一致しておられた。

「お茶の水幼稚園の保育は、今はとても通用いたしません」と述べる堀合氏の潔さ。それは誘導保育の終焉といえるかもしれない。けれどその背景は、子どもたちが重荷を背負いすぎて、自分自身の生活を作り出すことが難しくなっているからのようである。幼児が遊ぶこと、それを支えることは、何かを学ばせるために必要なのではなく、幼児が自分自身を見つげるために必要であること、それが現代の子どもには特に不可欠であることを、私たちはもう一度、心に刻まなければならないようである。

津守氏は、ご自分の保育研究者としての長いあゆみをたどりながら、相手を支えるための幼児理解について述べられた。氏がいきついたところは「子どもとかかわりながら、子どもを理解する」「子どもの行動を表現として見る」そして「対等な人間として子どもを見る」「そのために自分が成長する」。

不思議なことに、保育の場でこちらの気持ちの持

ちようは子どもにとってもよく伝わる。それが子どもとの関係に決定的に作用する。恐ろしいくらいである。「難しい子ども」ほどそうである。「難しい子ども」はこちらの期待に乗ってくれない。彼らは「自分がどう思われているのか」ということに、つまりこちらの心のありようそのものに、直接応答するよう思う。この根源的な関係性は、保育研究の俎上に乗せられるのだろうか、あるいは乗せるべきなのだろうか、「正直なところ考え込んでしまう」。

人と人との関係を対象にする保育学こそ、科学性、客観性、実証性にこだわり過ぎて、自らの手を縛るのではなく、もっと生命性、個別性、共感性を組み込んで、子どもの幸せにつながる学問にしていかなければならないと思う。冒頭の秋山氏の『農学栄えて、農業滅ぶ』のことばが新たな形でまた響いてくる。

(山口大学)